
予言ちゃん

たまと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

予言ちゃん

【Nコード】

N9078A

【作者名】

たまと

【あらすじ】

予言の当たる確率が今のところ百発百中（？）の予言ちゃん。その予言ちゃんを取り巻く人々のお話。

会えなくなる。

昼食時間の学校の屋上

「タカシは、明日からリナちゃんと会えなくなるよ。」

予言ちゃんにそう告げられた。

予言ちゃんの予言は、絶対に外れない。この前、『タカシは、大事な物を無くす』と告げられた時は家の鍵をどこかに落としたし、一年前の『タカシに不幸な事が起こる』という予言の時は、骨折した。

今まで予言ちゃんに告げられた予言は、絶対に当たるという事だ。少なくとも、俺に告げられた予言は。

「えー、マジかよ。ショック。」

そう口では軽く言ったものの、心中はかなりショックだ。

“リナちゃん”とは、密かに俺が想いを寄せてる同じクラスの女子だ。

最近、少しづつ話しかける様になったのに…

「タカシ、いいの？」

「『いいの？』って何が？」

俺は、リナちゃんに“密かに”想いを寄せてたわけだから、あまり人にはこの恋心を告白してない。

予言ちゃんも例外じゃない。

「別にタカシがいいなら、いいけど…」

予言ちゃんが、意味深な言葉を残す。

「会えなくなるって、転校かな？」

俺は、そんなことを何気に訊いてみる。

「さあ？わからない。」

予言ちゃんは、絶対に外れないことしか教えてくれない。

何でも今までの百発百中でやってきた予言を外したくないらしい。

まあ、そんな予言ちゃんの予言だから、俺は確実にリナちゃんに会えなくなるんだろう。

改めて考えるとかなりショックだ。

今は、昼食時間だからあと二時限。

別に席が近い訳でもないから、その二時限で話す機会は殆ど無いだろう。

結構本気だったのにな、俺。

『タカシ、いいの？』

予言ちゃんの言葉が、頭をよぎる。

良くない。

全然良くない。

好きなんだよ。

本気で好きなんだよ。

告白しよう。

放課後が、良いか？

いや、放課後に確実にリナちゃんに会える保障は、無い。

じゃあ、五時限目後の休憩時間？

ていうか、本当に告白しようか？

「リナちゃんは、今は友達と一緒にE組で弁当を食べている。」

考えてる俺の横で、ずっと黙り込んでた予言ちゃんは、急に口を開いた。

ちよっとした予言？

気付いたら足は動いていた。

*
*
*

あの予言の次の日の昼食時間。

俺は、また屋上にいた。

予言ちゃんも、もちろん居る。

俺は、少タイライラしていた。

「何怒っているの？」

予言ちゃんが、そう俺に訊いてきた。

俺の答えはもちろん。

「『リナちゃんに会えなくなる』って、リナちゃんはリナちゃんでもD組の藤堂里奈さんじゃねえか！」 何でも昨日、D組の藤堂里奈が転校したらしい。

俺のクラスのA組の佐伯利奈は、今日、普通に登校してきた。

「予言、当たってるじゃん。」

予言ちゃんは、言った。

そう当たっている。

だが、俺は、藤堂里奈とは何の面識も無い。

「あー！昨日、勢いで告白しちゃったじゃないかー！」

皆の前で告白したから、今日、皆の目線がとても気まずかった。

「いいんじゃないの？好きだったんだから、告白しても。」

一理ある。

いや、全理ある。

俺はこんな機会でもなかったら、きっと告白なんて卒業式ぐらいいにしかないだろう。

でも、それじゃあ遅い。

わかってる。

わかってた。

「でも、アレは予言でも何でもねえよ。皆、昨日には藤堂さんの転校を知っていたみたいだし。」

予言ちゃんは、少し間を置いてこう言った。
「だって、予言外したくないし。」

俺の高校にいる予言ちゃん。

その予言は、今のところ百発百中。

会えなくなる。(後書き)

駄文です。すみません。完全に勢いで書きました。

告白される。

「リナちゃんは、今日、告白されるよ。」

朝、登校してきたら『おはよう』の代わりに予言ちゃんから、
そう言われた。

予言ちゃんの予言は、侮れない。

予言ちゃんは、“予言ちゃん”と呼ばれてるわりには、そう頻
繁に予言をしない。

だけど、たまに予言をしたらその予言は必ず当たる。

一番、皆に有名な予言は、“校長交通事故”の予言と一年前の
“斉藤君の骨折”の予言だろう。

そんな予言ちゃんの予言だから今回も必ず当たるのだろう。

「え、誰に？誰に？」

「さあ？わからない。」

予言ちゃんは、必ず当たる予言しかしない。

当たるかどうかわからない予言はしないらしい。

「予言ちゃん、お願い！予言じゃなくて、予想でいいから教えて！」

自分が、告白されるんだ。

そうしつこく訊くほど気になってしょうがない。

「うーん、どうだろう。木村君がタカシあたりじゃないかな。あと加賀君とか…、ダメだ。わからない。」

頼りない答え。

でも、今日告白されるのは、きっと確実。

そんな状況は、相手が誰かわからなくてもワクワクする。

でも、こんな急に告白なんて…

あ、

「リナちゃん”って、D組の藤堂さんじゃないでしょうね？」

去年の終わり頃、私は予言ちゃんにこう予言された。

『リナちゃんは、来年はD組だよ。』

そしたら、見事に藤堂さんが、D組になった。

確かに二人共、名前が“リナ”だから間違いではないけれど…

「大丈夫。今日は佐伯利奈が誰かに告白される。」

・・・

なんかほつとしたような、拍子抜けしたような変な気分。

「『告白される』か…。あんまり好きじゃないなあ。」

予言ちゃんが、呟く。

「え、なんで？」

他愛もない質問。

「だって、嫌じゃない？たとえ、両想いだとしても相手の方が気持ち上な気がして……」

予言ちゃんが、そう言ったところで鐘になる。

* * *

『相手の方が気持ち上な気がして……』

予言ちゃんの言葉は、四時限になった今でも何故か頭の中で何度もリピートする。

そういえば、今まで告白したことないな。

されたことはある。告白されたら、その人がいい人だったら、他に気になってる人がいてもOKしてしまう。

そんな私。

ダメだな、私。

大体、今日、告白してくる人は誰か想像はつく。

私もその人の事は、前から気になっていた。

予言ちゃんの今まで百発百中の予言を外しなくなった。

私から告白する。

*
*
*

放課後

結果から言つと私から告白するという予言への抵抗で行った告白はうまくいった。

私は、今日の昼食時間の始めに加賀君に告白した。

うまくいった私の初めての告白。

うまくいった、予言ちゃんの予言外し。

と、言いたいけど...

うん、嘘。

告白も予言外しもうまくいかなかった。

加賀君は、彼女がいるという理由で断られた。

予言の方は、加賀君に告白したあとに、斉藤君から告白された。

残念な結果。

だけど、心はそんなに暗くない。

むしろ清々しい。

自分から告白する勇気を得たから。

斉藤君には、『ちよつと考えさせて』と言ったが、明日断るつもりだ。

でも、今日の斉藤君の告白でちよつと斉藤君のことを好きになつてしまった。

あんな大胆な告白されたらねえ…

かなりドキツとした。

だけど、断る。

だから、断る。

いつか私からもつと斉藤君のことが好きになったら私から告白したい。

私の方が、気持ちが上という証明に私の方が大胆な告白をしようと思っている。

私の高校にいる予言ちゃん。
その予言は今のところ百発百中だ。

転校する。

『藤堂さんは、いつか転校するよ。…転校する理由？さあ？わからない。』

予言ちゃんにそう言われたのは、確か一年前くらい。
まさかあの時は、一年後にホントに転校するなんて考えてもみなかった。

私、藤堂里奈は、今日限りでこの高校を去る。

やり残したことは…ある。

友達と朝が来るまで遊びまくった。
先輩達に別れの言葉も言った。 だけど、加賀君…
まだ君にあの時のこと謝っていない。

「何やってんの？」

校内にある自販機の前でポケットとしてた私に誰かが話しかけてきた。

「予言ちゃん…」

「どうしたの？」

「別に…ただジュース選んでただけ。」

「へえー、三十秒も。」

数えてたの？

予言ちゃんは、少し変なところがある。

まあ、みんな公認のことだが…

「予言ちゃん、また予言当たったね。」

「ん？ああ、転校のこと。」

私は、自販機のアイスコアのボタンを押した。

「やつぱ、父親の仕事の都合？」

予言ちゃんが、訊いた。

「え！知ってたの？」

「うん。だけど確実じゃなかったから、あの時は言わなかった。」

予言ちゃんは、自販機でお茶を買った。

「何でもお見通しだね、予言ちゃん。」

「やり残したこととかは無いの？」

ホント。

何でもお見通しだ。

* * *

アレは、まだ高校一年の頃。

私は同じクラスだった加賀泰司と付き合い始めた。

加賀君の気持ちは、わからないが私は加賀君が大好きだった。
今でも…

私は加賀君に謝らないといけない。

一か月前。

私と加賀君は喧嘩をした。

理由は、私にあったけど私は折れなかった。

その日から、私と加賀君は一言も喋っていない。

自然消滅で言うのかな。

違うか。

取りあえず、あの日から私と加賀君は、恋人同士ではなくなっていた。

だけどね、加賀君。

私はまだ君のことが、好きなんだ。

だから最後に謝りたいけど…

* * *

「おい。」

その言葉で私の考えは切断された。

「え、へ？」

「またボーとしてたよ。大丈夫？」

大丈夫じゃない。

加賀君のことを考えたら泣きそうだ。

「あ、そうだ。」 予言ちゃんは、急に声を上げた。

「お別れのプレゼントに予言をするよ。」

そう言つと、予言ちゃんは目を閉じた。

三十秒ぐらい立つただろうか。

私は小さめのスチール缶に入っているアイスココアを全部飲み干した。

その時、予言ちゃんが瞼を開けた。

「今から…、うん、今からだな。今から体育館裏に行くと良い事があると思う。」 『あると思う』

その言葉は、予言ちゃんの予言では、初めて聞く言葉だった。

「自信ないの？」
そう訊くと。

「うん、無い。けど行かないときつと藤堂さんが後悔をする。」

予言ちゃんは、真面目な顔でそう告げた。

「あ、やばい。時間喰った。タカシが待ってるから、行くね。」
そう言つと、予言ちゃんは去っていった。

私は、何も考えずに体育館裏に向かって歩き出した。

* * *

予言ちゃんは、私にこれを見せたかったのだろうか？

体育館裏に着いた私が見た風景はほんの少し距離を置いて向かい合う女子と男子。

どうやら、女子の方が告白する場面に私は来たらしい。

私は、校舎の影に隠れてそれを見ていた。

私は、その女子と男子を知っている。

女子の方は佐伯利奈。

去年、隣のクラスで、名前が同じ“リナ”だから印象深い。

もう一人は…

加賀泰司。

予言ちゃんは、これが私にとって良い事だと思ったのだろうか？
好きな人が告白されるのを見るのは良い事なのだろうか？

そう考えていると、加賀君が口を開いた。

「ごめん、俺、付き合ってる奴がいるんだ。」

え？

「え？加賀君って藤堂さんと別れたんじゃないの？」

そう、別れた。

もう新しい彼女が出来たんだ…

「うん。多分、藤堂は別れたと思っていると思う。だけど、まだ別れの言葉も無いし、それに…俺はまだ藤堂が好きなんだ。」

え？

「俺が一方的に付き合ってたかと思ってただけかもしれない。だけど、まだ別れの言葉も無い。だから、佐伯とは付き合えない。」

*
*
*

それから、どうなったかはあまり覚えていない。

私は、ずっと校舎の影で涙を流し泣いていた。

悲しいのかな？

嬉しいのかな？

わかんないや。

でも涙は止まらない。

そんなうずくまって泣いている私に差し出す手があった。

「か、加賀君……」

今なら言える。

あの時から言いたかった『ごめんなさい』を。

だけど、私の口から出た最初の言葉は、

「ありがとう。」

泣きながらだから、上手く言えたかはわからない。

私のいた高校にいる予言ちゃん。

その予言は今のところ百発百中らしい。

付き合う。

「加賀君は、藤堂さんと付き合いそうだね。」

何言ってるんだ、こいつ。

高校入学して入学式が終わり体育館から自分のクラスについて初めて言われた言葉が、コレ。

「あ、あー、気にしないで。予言ちゃんは、少しおかしいから。」

横から入ってきた“予言ちゃん”と言われた奴の友達と思われる奴は、通称“予言ちゃん”の口を両手で塞いだ。

「俺、隣のクラスの斉藤隆司。よろしくな。」

こいつは、まともらしい。

「俺は、加賀泰司。よろしく。」

通称“予言ちゃん”は、口を塞がれつつもモガモガと何かを言っていた。

* * *

こいつ等の話を聞くと、なんだか不思議な話ばかりだ。

予言ちゃんは、予言の当たる確率が100%という話に。

そのお陰で今日は、交通事故に遭うはずのバスに乗らなかった

りと。

なんかうさん臭い。

「大体、藤堂って誰だよ？」

「さあ？わからない。」

ム力つく返事だ。

そこで鐘がなった。

「あ、俺、自分のクラス戻るわ。」

斉藤が去った。

俺と予言ちゃんは、隣りの席。

どうしよう。

斉藤なしで予言ちゃんと話せる自信がない。

予言ちゃんは、はっきり言って第一印象最悪だ。

意味分からん事言っし、無愛想だし。

ガラガラ

クラスの担任らしき眼鏡の男が、教室に入ってきた。
「はい、席について！」

* * *

それから担任の自己紹介、クラスの皆の自己紹介が終わった頃。

ガラガラ

「お、遅れて、すみません！」

一人の女子生徒が、教室に入ってきた。

きつと不自然に一つ空いてる席の子だろう。

にしても、初日から遅刻ってどんな奴だよ…

「藤堂里奈さんだね？」

「はい。」

その子の顔を見た。

一目惚れだった。

「乗っていたバスが事故に遭ってしまつて…」

* * *

「俺と藤堂って、いつごろ付き合っの？」

入学式から一週間経った。

学校にも慣れ。

预言ちゃんにも慣れた。

「アレ？占いとか信じないんじゃないかなかったっけ？」

朝の教室。

预言ちゃんは俺の質問にそう答えた。

確かに俺は、占いとか信じない奴“だった”。

だけど、预言ちゃんと一緒に居ればそんな奴も変わっちまう。

「別にいいだろ。教えてくれたって……」

「うーん、どうだろう？いつ頃……うーん、わかんないや。」

一週間経って预言ちゃんについて分かったこと。

それは、絶対に当たる预言をする。

逆に“絶対に”当たる预言しか他言しないらしい。

「加賀君、藤堂さんに惹かれてきたの？」

预言ちゃんは、なんでもお見通しの気がしてムカつく。

「いや、別に。」

惹かれてる。

けど、预言ちゃんへの抵抗の言葉が出る。

『藤堂さんと付き合いそうだね。』

その预言とは裏腹に俺と藤堂は、全く接点はない。

预言ちゃんは、いつ頃かは预言してないから一年後二年後、い

や、もしかしたら大人になってからかもしれない。

予言ちゃんは、少し黙り込んでこう言った。

「あ、加賀君。明日は、絶対に休まない方がいいよ。」

まるで何かを思い出したかのように予言ちゃんは言った。

* * *

翌日。

台風が上陸したために学校は、休みになったらしい。

俺は、馬鹿か？

俺は、暴風の影響で外に出れなくなった校舎にいる。

一応、教師は一人二人居て、台風対策をしていた。

その教師二人に『今は、暴風で外に出るのは危ないから風が弱くなつてから帰りなさい。』と言われ、一人自分の教室で自分の席から窓の外の様子を見ている。

『明日は、絶対に休まない方がいいよ。』

昨日、予言ちゃんに言われたことを思い出した。

何が、『休まない方がいいよ。』だ？

怒りが沸き出てきた時。

ガラガラ

「え、あ、加賀君も！？」

藤堂さんだった。

そこから、藤堂と俺は、本当の意味で惹かれあっていく。

その半年後、俺達は付き合い始めた。

*
*
*

「さよならだね。」

藤堂が、引っ越す日。

俺は学校をさぼって藤堂の見送りにきた。

「遠くに行っても忘れないでね。」

涙目で藤堂は言った。

藤堂の親は車で待つてくれている。

「また会えるよ。」

俺は言った。

「予言ちゃんの予言よりは、頼りないけど、コレは“俺の予感”。」

しばらく話した後、藤堂は、親の車に乗った。

「いつになるか分かんないけど、いつか必ず迎えに行くから！その時まで、俺のこと忘れんなよ！」

去り行く藤堂の背中に喉がはち切れそうなくらい大きな声で言った。

「うん、待つてる。」

藤堂は、枯れた声でそう答えた。

*
*
*

あの台風の次の日。

予言ちゃんからこう告げられた。

「加賀君と藤堂さんは、将来一緒にいそう。」

「何それ？予言？」

「んー、いや、勘。」

俺の学校にいる予言ちゃん。

その予言は今のところ百発百中。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9078a/>

予言ちゃん

2010年10月20日13時24分発行